

## 田小屋野貝塚の視察 1 経緯について、2 現状について

### 1 経緯について、

HP では、以下のように説明されています。

田小屋野貝塚は縄文時代前期から中期（約 6,000～4,000 年前）を中心とした遺跡です。遺跡は台地上に立地し、ヤマトシジミなどの貝殻が堆積してできた貝塚が点在しています。

この貝塚が築かれた当時は、温暖化に伴う海面上昇（縄文海進）の結果、津軽平野の広い範囲に海域あるいは湖沼域が広がっていたと考えられています。

貝塚の出土品からは、縄文人たちが集落の眼下に広がる水域から様々な食料を手に入れていたことが分かります。日本海側では数少ない貝塚として、1944（昭和 19）年に亀ヶ岡石器時代遺跡とともに国の史跡に指定されました。



県道から上がった台地上の地形に田小屋野貝塚がある。



亀ヶ岡縄文遺跡と田小屋野貝塚の配置図

世界遺産の認定書

## 2 現状について

田小屋野貝塚は、青森県つがる市木造にある、縄文時代前期から中期の貝塚遺跡。1944年6月26日に国の史跡に指定されている。指定面積は約1万4千平方メートル。また2021年には「北海道・北東北の縄文遺跡群」として世界文化遺産に登録された。さらに、平成20年(2008)以降にはつがる市教育委員会が継続的に発掘調査し、成人女性の人骨などが見つかった。という記述もあります。

この貝塚の特徴は、歴史的な発掘施設であるということだけでなく、現在も新規に継続的に発掘作業が行われているものでした。ご案内いただいた学芸員の方から、将来の構想や予定をお聞きしました。それだけ、遺跡の規模が大きいのでしょうか。



田小屋野貝塚 2022. 07. 07の写真（左右とも） 無数の小さな貝殻が出土している

### 補) 縄文住居展示資料館カルコ視察

つがる市のHPによると、以下のように記載されています。

(縄文住居展示資料館カルコの) 館内に縄文時代晩期の大型竪穴建物を復元しており、内部は縄文時代のくらしが再現されています。亀ヶ岡石器時代遺跡から出土した遮光器土偶の精巧なレプリカのほか、つがる市内の遺跡から出土した土器・石器を中心にテーマ別に展示しています。また、田小屋野貝塚の展示コーナーでは、出土した遺物や縄文時代前期の成人女性人骨を公開しています。





縄文住居展示資料館カルコでは、竪穴式住居内の生活を復元した展示や、メインの遮光式土偶を展示（本物は 1 点のみ出土、上野の国立博物館に収蔵）写真はレプリカですが、珍しい後ろ姿です。背面も丁寧な文様が施されているのが特徴です。

#### <所感>.

2 年前に個人視察でつがる市に初めて訪問したのですが、それを無所属会派の皆さんにも案内し、今回の無所属会派視察になった次第です。そこで、今回は記載事項をメンバーで分散して報告いたします。

私は函館の旧函館区公会堂と、この田小屋野貝塚の報告書を作成することになりました。

なお、全回の個人視察に関しては、下段のリンク先をご覧ください。

2022.7.7-8 視察報告 青森県つがる市 亀ヶ岡石器時代遺跡、その他（施設と発掘物の PR 方法）

<https://yoshidaben.jp/shousai/gikaikatsudou/sisatsu/document/20220707-2.html>

田小屋野貝塚は、温暖な縄文時代、汽水湖の十三湖に面していて、豊富水産物に恵まれていたようで、シジミ（ヤマトシジミ）が大量にとれていました。また、温暖さによって水面（十三湖は汽水湖で、海水面と同じ高さ）が高くなり、この田小屋野貝塚自体は水辺になっていたとされてきました。

一方で、クジラの骨などもあったのは、十三湖から西側の丘陵地の先は日本海となっており、海岸と汽水湖の双方に挟まれた海産物の宝庫であったのでしょう。あるいは、汽水湖に紛れ込んだクジラをとらえたものかもしれません。そうした遺物の存在で、当時の豊かさが示されています。

## ◎十三湖が生み出す文化



2024.07. 08 の視察時に撮影した写真、十三湖の北端のほとりと、十三湖大橋付近。今回はここまで時間的に足を延ばせませんでした。(参考写真)

この田小屋野貝塚やすぐ近くの亀ヶ岡遺跡、あるいは、青森市内にある有名な三内丸山遺跡などを含めて、時代は前後していますが、それらの縄文遺跡の出土品の種類、量の豊富さです。



田小屋野貝塚に至る坂道から広大な耕作地が見える。昔はこの光景がすべて十三湖。右側写真の手前辺りは遺跡発掘を終え、埋め戻しの地域。



十三湖の西側の丘陵地のさらに向こうには、日本海に向けた風力発電の風車が並ぶ。丘陵地には多数の湖沼があり、これらも豊かな自然をはぐくんでいる。(参考写真)



さらに、この日本海と十三湖の間にある丘陵地自体が豊かな地域と思われます。以下は、つがる市牛瀉町にある丘陵地帯にある高山稲荷神社。広大な丘陵地に拝殿や奥の院に相当する建物が点在し、今の時代にもこうした鳥居が増設され、さらに人を引き付ける魅力を高めていることが分かります。(参考掲載)



つがる市高山稲荷神社 この先は日本海が近くに迫る (参考写真)

縄文文化の当時、このつがる市周辺は温暖な天候でしたが、日本海からの風は厳しい時があったかもしれませんが、この丘陵地で日本海の風が止められていたでしょう。

### ◎成人人骨の発見と遺跡の注目度について

田小屋野貝塚の存在は以前から知られていましたが、成人人骨の発見は近年(2012年)のことでした。その発見時、保存状態があまりにきれいで、事件性を考慮され、警察を呼ぶようなことがあったというエピソードを聞きました。

日本海側は貝塚が少ないという(はっきりした根拠を聞いていない)が、この田小屋野貝塚は、当時の十三湖のほとりにあり、それが汽水湖ということもあって、水産物に恵まれ、とりわけ、ヤマトシジミがたくさん採れていたというということです。現在の十三湖は、狭くなっていますが、汽水湖であることは変わらず、ヤマトシジミをはじめとする水産物が豊富に取れています。



前回の個人視察で2022年7月8日に撮影した十三湖。これらの風景から汽水湖であることがこの写真からも分かる。(参考写真)

縄文時代の貝殻で出来たものが田小屋野貝塚で、小さめの貝殻の層がびっしり埋まっています。その傍らに人が埋葬され、遺骨になったものが田小屋野貝塚で発見されたものですが、貝塚の貝殻のアルカリ性物質が酸性の土壌を中和して、その人骨の保存状態を著しく高め、さらに、学者の人骨分析で、この遺骨が縄文時代の成人女性のもつと分かったとのことでした。この成人女性人骨は、上記のように、つがる市庁舎のそばにある、「縄文住居展示資料館カルコ」内の田小屋野貝塚の展示コーナーにある、専用ガラスケースに収められています。



写真は2024. 07. 07に撮影したもの。今回はカルコではほとんど撮影せず。

とするならば、他に縄文時代の人骨がいくつも見つかってよさそうですが、現在まで発見されたのは、この一体に限るとのことです。遺跡や遺物の発見の難しさを知るものでした。

まだまだ、この田小屋野遺跡の発掘は続くわけですので、これからも様々の発見があり、新たな重要遺物も出てくるものでしょう。今後のつがる市の縄文遺跡発掘と学芸員の方々の努力に期待したいと思います。





田小屋野貝塚 出土人物の実物大表示 説明板の場所では自分の靴（スニーカー）が写る

### ◎田小屋野貝塚の発掘の取り組みについて

前回、2年前に田小屋野遺跡を訪れたときは、地表を新たに掘削して、遺物の調査が行われていました。埋まった多数の貝殻が見られましたが、それがどのようなもの出土したかは、現在、資料の整理、記録化が行われているとのことでした。こうした遺跡の発掘では、調査を終了した後は、土の埋め戻しが行われているということで、今後、新たなる発掘調査が行われる時は、また、別の区画が発掘されることとなります。この田小屋野遺跡はまだ未発掘のエリアが広範囲に広がっています。

この辺りは以前には住居があった場所もいくつもあり、それらの中で区画内の家屋が転居、解体されたものがいくつも見かけられました。ある意味、縄文時代が多くの人々が居住し、それ以降も人の居住経歴があり、現在の方が以前より、居住者数が少なくなっているのではないのでしょうか。人口の増減に一番影響しているのは、歴史的な天候の変遷で、縄文時代当時は温暖だったが、その寒冷化が進み、人の居住が極端に減り、連続した文明とは見られない時代を経て、現在のつがる市になって、世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一角に縄文遺跡の一つである「田小屋野遺跡」と位置付けられる場所になったのでしょうか。





この県道を西に向くと田小屋野貝塚、目の前（東側）は旧十三湖の水面だったが今は水田の耕作地やメロン栽培用のビニールハウス）となっている。縄文遺跡案内所の PR 用自動販売機の飲料を利用。

### ◎ 出土品の文化交流遺物について

遺物の出土品は、縄文住居展示館カルコヤ、木造亀ヶ岡考古資料室（縄文館）に収蔵されています。



ケースの左側下段はベンケイガイ  
岡考古資料室（縄文館）



右は木造農業者トレーニングセンター内の木造亀ヶ



左は骨角器、穴が開いた針がつくられていました。右はベンケイガイの腕輪は半製品が出土し、同時代のベンケイガイの製品が北海道の遺跡から見つかっていることで、この田小屋野貝塚から北海道に運ばれた可能性も提起されていました。

当時からの石器類では黒曜石がその利便性の高さから幅広く流通していました。この地方の出土が聞きませんので、黒曜石を他から受け入れ、ベンケイガイの腕輪と交換していた可能性が高いわけです。

### ◎学芸員の人数について

木造亀ヶ岡考古資料室（縄文館）の資料展示の中に、新聞資料があり、つがる市教育委員会文化財課の学芸員の方の紹介がありました。専門的な研究を経た人材が 4 人もそろい、それぞれの



担当をされていました。4年前は、遺跡発掘の現場を担当されている方から、現地案内を受け、今回は別の方から現地や資料館の説明をいただきました。



また、亀ヶ岡遺跡の場所には、縄文遺跡案内所が設置されていますが、その日はボランティアの方も、亀ヶ岡遺跡と田小屋野貝塚の現地案内に同行されました。



この2枚は、吉田が撮影したもので、右の写真は、左手の森が亀ヶ岡遺跡、右側が田小屋野貝塚になります。この辺りは当時の旧十三湖にあたるでしょう。

(終わり)